

きょうまちや
京町家に生きる

—秦家（京都市太子山町）の聞き取り調査から—

秋元せき
小林丈広
三枝暁子

はじめに

祇園祭山鉾町の一つ、太子山町（京都市下京区油小路通仏光寺下る）にある秦家は、江戸時代中期から薬種商を営んだ「松屋与兵衛家」として知られ、一子相伝の秘薬「太子山奇応丸」で名をはせた。同家の建物は、元治元年（一八六四）の大火（どんどん焼け）で焼失したものの、明治二年（一八六九）に再建され、今に至っている。薬種商は、当主秦与兵衛（凱彦）氏が他界されたのを契機に、一九八七年（昭和六二）にたんだものの、建物は一九八三年（昭和五八）に京都市有形文化財に登録されており、今もなお与兵衛氏の妻トキさんとめぐみさ

んの住み暮らす家として、風格あるたたずまいを見せている。

京町家の歴史学的調査を進めるため、秋元せき・小林丈広・三枝暁子の三名は、二〇一四年から秦家を継続的に訪問し、調査を重ねており、その過程で、トキさんとめぐみさんの生い立ちや、秦家での暮らし、家業（薬種業）の様子について聞き取り調査も行っている。このうちトキさんからの聞き取り調査の内容については、すでに二〇二一年に『京都市歴史資料館紀要』第二九号に「歴史を伝え、歴史をつむぐ、京町家の暮らし—秦家（京都市太子山町）聞き取り調査の記録—」として発表している。ここでは、秦家に嫁ぐまでの大阪の生家での暮らしから、戦中・戦後にかけての秦家での暮らし、薬種業にまつわる思い出などについて語っていただいたことをまとめた。

こうした成果を前提に、ここでは、二〇一五年八月一〇日・九月二三日にめぐみさんから聞き取らせていただいた内容について紹介させていただくことにしたい。具体的には、めぐみさんの生い立ちと秦家での暮らし、薬種業をたたくから現在に至るまでの家に対する思いについて語っていただいた、その内容をまとめてみる。

京都市による歴史的建造物保護の歴史は、一九八一年（昭和五六）の「京都市文化財保護条例」の制定に始まる。ここでは有形文化財と民俗文化財について、指定と登録の二つの制度が設けられており、とくに「届出制による緩やかな規制に基づく」登録有形文化財の設定は、「国の文化財登録制度に先立つ画期的な制度」であったとされている（石川祐一『京都を彩る建物や庭園』制度の一〇年『京都市文化財保護課研究紀要』第五号、二〇二二年）。しかし、たとえ「緩やかな規制」のもとの「登録」文化財であったとしても、修理事業に要する費用負担の義務をはじめ、家の維持・保存のために所有者が背負わねばならないものはあまりにも大きい。小さいころから住み暮らしてきた場が、公共の「文化財」となるということ、そして「文化財」としての家を維持・保存していくことは、家の所有者にとってどのような意味をもつのか。今回の聞き取りは、当事者の思いを聞く貴重な機会となったと同時に、歴史学研究

者である私たちがこうした問題と向き合う機会ともなった。

なお、漢字の表記は、旧字体を現行の字体に改めることを原則とし、固有名詞に関しても俗字・異体字はできうる限り通行の字体に改めた。また、聞き取りの本文中、歴史的な用語や京言葉なども含まれているが、お話のニュアンスを可能な限り尊重することにし、必要に応じて「〔 〕」で注記した。

一 めぐみさんの生い立ち

——（三枝） 今日、めぐみさんがお生まれになってこのお家で過ごされた今日までの歩みについて、ぜひ聞かせていただければと思います。

お生まれになったのは、いつでしょうか。

めぐみさん 昭和三二年（一九五七年）の二月二十五日。京大病院で生まれたそうですけど。病室の真ん中にまきストープがあったって聞いてます。「鯉こく」という白味噌汁を母乳がよく出るからと言って祖母が作って父がバイクで（当時スクーターと言いました）病院に届けたという話はよく聞かされました。

——（小林） 京大病院で出産される方は、多かったですか。めぐみさん いえ。私の友達は、その油小路通が上がったところに梅鉢医院ってあるんですけど、地域の個人医院の産科で生

まれた人が多かった様です。私はなぜか京大病院。

——（小林）何か事情があったんですか。お母さんの記憶では。

トキさん 京大病院は、この家の方針で決まりました。

——（小林）やっぱりお母さんが気を遣わないようにっていうか。

トキさん そういうことです。結局、里へ帰らずに、もうずっとここで養生して。何かあったときでも、京大やと安心やというのがまず一番にありました。

——（三枝）お母様は、おなかが大きくなっていたときは家の中でのお仕事はどうされてたんですか。

トキさん 同じように、みんなと動いてました。ぎりぎりまで。それは体のためにいいんやっていうことで。

——（小林）お産婆さんも、そのころはもうこの辺の人はあんまり使われてなかった。

めぐみさん 私の友達で、家で生まれた子っていないかもしれないです。

トキさん もうなかったな、あの時代は。

めぐみさん 聞かないですね。この辺には今もありますけど個人の産婦人科があるんですけど、そこか。

トキさん そうやな、それぐらいやな。

——（小林）今でも、京大病院でも出産する方って。

めぐみさん どうなんですかね。

トキさん どうなんでしょう。あんまり聞かない。

——（三枝）弟さんが生まれたときも、同じように京大病院だったんですね。

めぐみさん そうですね。

トキさん うん。

——（小林）市電で通って。

トキさん はい。

——（三枝）逆に、その当時、京大病院に來られてる妊婦さんは、どんな人たちがいらしてたんでしょう。

トキさん どんな人たちやろうね。

——（三枝）そんな会話もしないですよ。

トキさん あんまり記憶がないんよ。お隣の人と話したこともないし。あんまり社交的やないので、私自身も。どんな人と一緒にやったかっていうことも記憶にない。

——（三枝）生まれてから、一週間ぐらいは病院にいるんですか。

トキさん はい。退院したら、家の二階で、自分の部屋で、ベッドを別に、部屋に横に置いて。ほんで面倒見ました。お手伝いさんもいましたし、その時分は。

めぐみさん 面白い話で、母が乳腺炎で大変で、お乳が張って。女の子やっただから、片っぱい飲み切れるんですけど、両方をよう飲み切れんでお乳が余って。そしたら、伯母が、物心付くまでお乳吸うてたから、覚えてるとか言うて、お乳吸うて言うて、吸うたとか吸わなかったとか。そんな話も聞いたことありますから。

トキさん 覚えてる、それは。

めぐみさん お嫁さんやけど、厳しいけども、でも、家庭としては温かい家庭やっただんなかと。そんな弟の嫁の乳房に口付けるって、ちょっと想像できないですけど、そんなことを伯母はやったっていうのが、聞くと、今思うと、非常に温かい家族愛というか。

トキさん それは、本当に温かい家族でした。厳しいところは厳しいですけど、それでも、よっぽどなことやなかったら、そういうことは言わへんし。

——(三枝) めぐみさんが覚えていらつしやる、最も古い記憶というのと、どんな記憶でしょうか。何となく覚えている記憶は……。

めぐみさん 私の覚えている記憶ですか。

私、母を近くに感じたのは、かぜ引いて熱出したときなんです。二階で寝かされたときに、二階に食事を運んできてくれ

て。スプーンでおかゆみたいなの、おじやを食べさせてもらったり、薬を飲ませてもらったり。とにかく座っていることがないんです。どっか行ってくつて言ったら、祖母か番頭さんが私の子守をして、家族でどこかへ出かけたという記憶がないです。出かけたって言うたら、おついたちに八坂神社へお参りに行くのと、それと家族の誕生日に、やっぱり祇園さんへお参りに行くのと。お出かけっていうと、その二つ。ちょっと子供のためにっていうと、時々動物園に連れて行ってもらったことがありますけれども。どっか行くというと、だいたい番頭さんか祖母とで。家の中でも、とにかく大人は大人で動いていて、子供のために親が向き合うというような習慣がなくて。常に間にはおばあちゃんが、何かやっている。裁縫箱出してるか、編み物してるか、それこそ梅干し漬けてる。お盆の今ごろになると、十日参りに行く。お精霊(しらいい)さんの準備について歩いて、常に一緒やったです。

私たち子供が、ああしたいこうしたいということを言うた記憶ないです。もうすべて大人のスケジュールにはめられていつているという、受け身というか。そういう子供時代をずっと過ごしてきました。

もちろん子供のことも考えてくれましたので。父は、自分の趣味ですけど、魚釣り行くいうと、子供連れていけるときは

私たちを一緒に連れていってくれて。それで琵琶湖の湖岸の早春の風景とか、それで得てきた釣果を家で母が料理をして、うまいと言って食べて。また、その蘊蓄を話している父がいて。家の食卓が一つの、私にとっては、今の自分を作ったものになつてゐるような気はしますけれども。

家族水入らずという、親と子という家庭つていうよりは、やっぱり複雑ないろんな人たちの中で育つてきたというか、生きてきたというか。

で、祖母は孫を猫かわいがりしなかつたですね。いつも。ちよつと怖いおばあちゃん、母の実家の祖母とは全然違う感じがしました。母方の祖母はもう。

トキさん 怒らへんしな。

めぐみさん 目の中に入れても痛くないという気持ちが子供心にも伝わってきましたけど。ただ、何かのとき、例えば七五三やとか、あと、祇園祭に。お祭り来ると、ちゃんとした浴衣を毎年やつてくれるの。新町、室町にちよつと反物を買に行くと。浴衣の寸法が小さくなつたら、衿ゆきまを合わせてくれたり、肩を上を下ろしてくれたりつていう調整。そんなことは、祖母がやつてくれました。で、おじいちゃんが亡くなつた後の法事とときに、いとこの女の子、おじの娘で私と六つ違つた、この子と私に晴れ着を着せるんです。三回忌やつたかな。それは、七五

三のときに着た晴れ着を、また丈を直して準備する。そんなことは、おばあちゃんがタッタタッタとやつて。何かそこにいる子供のために、きつしよ「吉書、節目」のときには、こういう形で積極的にやつてくれた。そういう祖母でした。

十日参りに行ったこととか、お盆というと、直火でなんば「南蛮黍の略。とうもろこし」を焼いて、お醤油かけて食べるのが父も好物で。そのなんばの皮とひげで、姉様人形を作つてくれたりとか、竹馬も作つてもらつた記憶があります。

何かそういう面白いことをしてくれた。あと、「ちつぽかっぱ」と言うんですけど、竹の皮で、中に梅酢に浸かつたシソを三角形に包んだもので。その三角から梅酢を吸うんです。それは祖母の実家から五月になると届いた筍の皮で作つたもので。あと、一二月になるとおくどさんの大釜で芋棒を炊いてそれを菜箸に刺して、ほいって手渡してくれて食べた思い出とか。子供の口に合わない食べ物でも食べないといけなくて、食べた思い出とか。そんな中で子供に合わせてくれたのは、唯一誕生日の献立ぐらい。何食べたいつて聞いてくれたのは。

——(三枝) どんなものをそのときは食べたんですか。

めぐみさん それは、タンシチュー。私がタンシチュー、タンシチューつて言つて。それも、伯母に付いて東洋亭の洋食屋さんへ。河原町の東洋亭に伯母が行くんです。伯母は一人で出か

けることがなくて、必ず番頭さんが付いていくか、誰かがいるんです。番頭さんと私と伯母とで。伯母の注文したタンシチュ―を私が食べて。全部食べたらしいんです。

——（小林） 丸太町のところですか。

めぐみさん そうです。伯母は、たぶん娘の頃からどこへ出かけるのもそんな調子で、歩いて一人で買い物へ行くこともほとんど習慣としてなかったようです。私は、お手伝いで買い物に行くのも当たり前の時代になっていましたし、伯母ほどではなかったですけど、この家の子としての約束事はありましたね。子供の頃はお小遣いというものがなくて、買い食いはしてはいけなかったので駄菓子屋さんや紙芝居屋さん、近所の縁日へお友達について行っても眺めるだけでした。初めて友達と映画へ行ったのは大学生になってからで。

——（小林） 屋台でも食べなかったんですか。

めぐみさん 食べなかったです。

トキさん 見て回るだけや。

めぐみさん 行って帰ってくるだけ。金魚すくいを一回ぐらいしたことがあるかな。

トキさん そのくらいやんな。一、二回やね。持って帰ってきたん。

めぐみさん 遊園地で乗り物乗せてもらったこともないです。

八瀬に遊園地ができて。でも、目的は、あんな山の中に水族館ができたのがすごいと父が言っていて、そこへスナメリクジラが来たから見にいこうと言っていて。

トキさん 自分が見たいからです。

めぐみさん で、行くんです。でも遊園地は素通りでした。あと、夏休みに比叡山の展望台のところまで日本鱗翅目学会主催の昆虫展をしたとき、父はその設営準備担当で、これに付いて来るか、というので一緒に付いて行く。とか。

それから、これも父が知人から夜間の動物園に来ないかと誘われたのに付いて出かけたのはよく覚えています。夜に出かけたことがとても印象に残っています。

二 小学校〜短大生時代の思い出

——（三枝） 小学校時代はどのように過ごされていたのでしょうか。

めぐみさん 小学一年の時に、伯母の知人が、その仏光寺通りの横の木賊山町（とくまのやままち）にあった佐野さんという電気屋さんの奥さんで、お宅の二階稽古場でお茶とお花を教えていて、お茶を習いに行けと言われて通いました。着物を着ていきましたね。被布やモスリンの着物や羽織も、祖母や母が縫ってくれて、それは

いろいろと用意してくれました。なぜか私も嫌がらずに六年生くらいまで通いました。

トキさん 小学校の間行つてたな。

めぐみさん だから、結構、千歳盆とか箱点はこだてとか貴人点きじんだてとか、そんなとこまで教えてもらったですね。

——(三枝) 流派は裏千家になるんですか。

めぐみさん 裏でした。でも、父は免状は要らんと。お茶を習うことで所作を身に付けなさいっていうことやつたんやと思っんですけど。中学生からは、生花も。

——(三枝) それも小学生のときですか。

めぐみさん 後半で。大きくなってからです。

——(小林) それ、どちらも同じ先生だったんですか。

めぐみさん 同じ先生で。佐野さんという、町場のお家の主婦が先生をしていて。年頃になるとお茶、お花は習うという時代でした。カルチャー教室で習うとかそういうのではなくて。

——(小林) お差し支えなかつたら、小学校から、どの学校かつていうのをちょっと教えていただけますか。

めぐみさん 学校ですか。学校は、公立の格致小学校で、郁文中学校。その後は家政学園高校(現在の京都文教高校)、短期大学〔同短大〕へ行きました。短大は、幼児教育科へ行きました。家政学園は伯母の出た学校だそうで、それで両親が決めた

ところへ行きました。

——(三枝) さつき、話題になりましたが、映画を観に行くとなるとどこへ行くのでしょうか。

めぐみさん 祇園会館に行きました。京極の映画館はあかん。怖いところやから行ったらあかんつて。だから、四条河原町なんかの繁華街へひとりで行くようになったのは成人になってからでしたね。

——(三枝) 先ほど、子ども時代、大人の間で過ごされたとおっしゃっていましたが、お料理や家業のお手伝いをするということもあつたんですか。

めぐみさん 料理は、晩ご飯のしたくの時間になったら、だいたい「台所」にいました。鯉節を削ったり、胡麻を擦るのから始まつて、「おひたし」を作るようになって。家では「おひたし娘」とか「酢味噌娘」とか言われてました(笑)。夕飯時は家にいれば必ず台所に立つてました。その時間に自分の時間を持つと叱られましたね。

トキさん はじめは、見るだけでしたけど。それからキャベツをみじんに切つて、ミキサーにかけたりとか。

めぐみさん 野菜ジュース作る。

トキさん そういふのをこの子がずっと。それから包丁を持つようになりました。

——(三枝) 小さいころの祇園祭の思い出について聞かせて
いただいてもいいですか。当時も、現在のように、小学生が、
歌を歌いながら物を売ったりとかつていうのはあったのでしょ
うか…？

めぐみさん ありました。今もありますが、町内に子供会があ
って、小学六年生までの子供達の会で、お祭りになると山の前
でちまきとお守りを歌を歌って授与するんです。私たちの時代
は子供が主体的にそれを楽しみにしていましたね。今は何か少
し違ってきているような気がします。保護者に管理されるなか
で歌わされているような。子供たちから疲れたという声が出た
り、休憩時間が決められていたりして、子供が自主的に自由
にお祭りを楽しめる雰囲気がないような気がします。

山が建つと欄縁の中で遊びました。何をするとということは一
いんですが楽しかったですね。日が暮れるとお風呂に入って夕
飯をすませて浴衣に着替えて表で花火遊びをしました。お祭り
はすぐそばにあったタバコ屋さんで花火を買って、道端に大き
な蝋燭を立ててもらって、花火遊びを楽しみました。夜に外で
遊べるのがすごく嬉しかったです。お年寄りも皆、家の前に出
した床几に座って、長々とおしゃべりしていました。

今は観光客が多くて、地元の人たちが表通りでくつろぐこと
ができないで、ずいぶん様変わりしました。



写真1 祇園祭宵山の秦家の概観(二〇一八年七月二五日撮影)

トキさん 変わったね。

めぐみさん お祭りはしているけれども、どう言うたらいいの
かな。子供たちのなかで、今どんなふうにお祭りが存在してい
るのかなというの思います。当時、会所はろうじ〔路地〕の
ずっと奥にあつて、シーンとしてるんです。神前番をしている

町内の人が座ったはるだけで。家の人には、たいっさん〔太子さん〕にお参りしてきなさいって言われて、心細いけど、一人で行ってお参りしてきました。ちらっと見える本尊の目が怖くて、もう走って帰ってきました。あと、巡行の朝は、父の袴姿を見るのが楽しみでした。で座敷で父が袴に着替えるんですけど、それがちょうど登校の時間で、後ろ髪引かれながら学校へ行きました。店の間には、山昇やまかきさんが来て、草鞋を付けたり、着替えたりしていました。重心が低くて手足のごつい人たちでした。祖母も、母も、番頭さんも、町内の大人たちはみんながざわざわと忙しくしていて、そんな賑わいのなかに背を向けて学校へ行くのがすごく残念だったのを覚えています。授業を終えて帰宅したら、山は躯体だけになっているし、全てがもう片付けに向かって動いていて、ああ、もう終わったんやなっていうのがね。子供頃から学生の間は、そんなことで、巡行に出るところを見たことがなかったですね。

——（三枝） 祇園祭のときに、太子山町の外に行くことは、なかったのでしょうか？

めぐみさん 行きました。少し大きくなってからは。新町通まで出ると岩戸山、船鉾のお囃子が聞こえて、夜店も出ていて、賑わった空気がわあつとあるんです。それに憧れましたね。うらやましかったです。西洞院からこっちは、もう、本当に、し

んとしてましたから。

トキさん お囃子がまずあるし。

めぐみさん なんで太子山にはお囃子がいないのやろって、子供のころはずっと思い続けてました。

——（三枝） 小さいころからのお話聞いてても、ご商売の方針にしても、何か家訓的なものがあるんですか。すごく芯があつて。

めぐみさん 家訓みたいなものは特にありません。ありませんけど、年中の祭事ごとは、決められたことを淡々と、別に疑うことなく、せなあかんからやるという姿勢を見てきましたので。それを見て、自分が今があるので。

トキさん やめよう思うたら、いつでもやめれるんですけど。お正月もやめて、どっかへ旅行にでも行こかっていったら、行けんことはないんです。

めぐみさん できひんだけ。

トキさん できひんだけで。お光りもないあの家を考えたら、ほっとけへんのです。

めぐみさん ほっとけへんな。

トキさん お餅もつかずに年末から出かけたら。

めぐみさん それはできひん。

トキさん そしたら神棚にはお光りもないっていう、そんな

写真2 青山の客迎えに際しての、鯖寿司作りの様子
(二〇一六年七月一六日撮影)



家、想像も…。ここにいる以上、それをやめるちゆうことは、とてもやないけど自分の気持ちに許さへんっていうか。そう仕込まれてきた。そういうことやねえ。

——(三枝) 小学校、中学校、高校、短大と進学されていっ

て、その後京都から出るっていうことはもう全くお考えではなかった？

めぐみさん なかったですね。

——(三枝) 家を守っていくうえで、支えてくださっているっていう方々というのはいらっしゃるのでしょいか。

めぐみさん 具体的な支えというのはありませんね。誰かに支えられているっていうのはないほうが、自分たちの思いのままにこの家を守ることができているように思います。応援してくださっている方々がありますが。

トキさん ただ、そういう目で見てもらってるっていう気持ちだけ。

めぐみさん そうですね、精神的部分でエールはいただいています。具体的に情報のやり取りとか、連携とかはなくて、ずっと距離を置くのが、この辺りの地域性でしょうか。それでいて、さてと言うとき、とても温かいものをお互いに感じたりする一瞬もあったりするんです。それは物質的なものではなくて、精神的な部分で。

トキさん 精神面っていうのは、すごく大きいです。

めぐみさん 大きいですね。

トキさん 何よりも、それが一番です。

めぐみさん そうした関係がいくつか作れたということがこの

今のこの家をとにかく、私たちを支えてくれている気はします。

三 文化財への登録と家の公開

——（小林） お家が文化財に登録されたのはいつのことですか？

めぐみさん 昭和五八年（一九八三）です。

——（三枝） 町なかでみかける、とくに「登録」や「指定」になっていない、けれども「町家」をうたっている飲食店などは、歴史でいうと、実はそんなに古いものでもないのでしょうか。

めぐみさん そんなことはないと思います。町なかに建つ町家のほとんどは、明治から昭和初期のものですし。ただ、商いの規模によって、使われている材木とか技術なんかの点で、建物としての価値はいろいろと思いますけど。私もそうでしたけど、住んでいる人にとっては自分とこの家であって、町家^{まちや}とは言いませんし、そういう意識もなかったですから。あたりまえのように住んで、そこに生業があつて。もともと、家^{うち}つて、そういうものなのやと思います。

社会の状況が変わってきて、家族や暮らしのあり様が変わっ

てきたら、その入れ物である家に求められるものが変わるのには仕方ないことと思います。そんななかで、歴史的なとか、建築的などという評価とは別に、家に対する思いというのはあると思うんです。それは、一軒、一軒、それぞれに違って、何らかの変化のタイミングに持ち主がどんな決断をするのかによって飲食店になったり、民泊になったり、次の世代が住み継ぐことになったり。その選択は、所有者に委ねられるもので。

私たちにとっての家というのはここで脈々と受け継がれてきた時間の詰まった箱で。形をなくするということは、その時間を絶つということ。苦渋の手段として、住まいの公開を決めました。そしてそれは、かなり重い決断でした。

——（小林） 一九八三年に登録をされるときには、何か家で相談とかは。

めぐみさん 何も。

トキさん 何もない。

——（小林） お父さんが決められたのですね。

めぐみさん そうでしたね。

——（三枝） そのころ、あちこちでそういう登録の動きについてのが町家であつたんですか。

めぐみさん 野口家も同じ頃やったかと。山鉾連合会の役員でよく一緒に、当時ご当主がうちに相談にみえたて聞きました

た。

——(小林) 市の文化財保護課のほうの担当はどなただったんですか、そのとき。

めぐみさん 当時はすべて父が応対して決めていましたので、わからないです。

——(三枝) 一九九五年(平成七)～一九九六年のころ、家をどうするかというときに、最後の最後で売るという選択を阻まれたものは、何だったのでしょうか。

めぐみさん それは、自分たちの以前の代でも、大変なときあったと思うんです。何度も難局を乗り越えて今、私たちがいると思うと自分たちの都合でこの家を手放す決断はできなかったですね。

あのときは、残すと決めて今日まで、今日までできましたけれど、でも、時間は止まりません。母も米寿を迎えましたし、この机ひとつ動かすにしても、一人では大変です。

トキさん 一人では無理です。

めぐみさん でも、やらないわけにはいけないですしね。

トキさん もう、こうやって公開して維持することもできなくなる。

めぐみさん だから限界はありますね。今後、どう継承していくのかというは、私たちにとっては、また大きな課題になって

います。いつまで経っても重たい話です。

——(三枝) 折に触れ伺っているとはいえ、公開して大変なことよかったことと、それぞれありますか。

めぐみさん 公開してよかったことは、自分を鍛えてもらえたこと。

トキさん 心身ともに鍛えてもらいましたね。

めぐみさん 色々な経験のできたこと、自分自身の足元を見つめ直す機会を得られたこと、これは感謝です。また、そんなかで見つけた気づきについて、公開したことで出会えた方々と語り合ったり、共感できたことは宝ですね。この家の存在に、意味を感じていただいていることを実感しています。

二十数年前の、あのときの苦渋の決断は、結果、間違っていないのかと思います。

——(三枝) 公開を始めたときには、もうお料理の提供やお料理の会を開くことも同時に考えておられたんですか。

めぐみさん いえ、そういったことは何も考えていませんでした。

——(三枝) じゃあ、まずは見学から。

めぐみさん いいえ、最初は京町家再生研究会の例会をこの家という依頼を受けまして、初めて、大勢の初対面の方々をこの座敷に迎え入れました。住まいを開けて、そこで見料、対価

を頂くという非常に勇気のある決断をされた。と、すでにご自宅を公開しておられた方からその時集まられた皆さんにお話いただいたのが、とても印象に残っています。その後、貸会場の提供。京町家貸会場というご提案を頂きパンフレットも作っていただきましたが、生活の場でもあることもあり、コンスタントに依頼も無く。京町家という空間をその家の味覚と共に体感していただくことを趣旨とした料理提供を考えました。

トキさん それが最初やね。

めぐみさん 母は、もう猛反対で。

トキさん そんなん続かへんって言われてましたけど。

めぐみさん でも、何かやらないと生きていけないわけですから。たまたま私が職場で上司から言われて調理師免許を取っていたので。最低限必要な環境は整えて。お食事どころではなく、最終目的は有形無形の京町家文化の維持保存継承が目的だということを理解してもらうのは難しいことでしたが、近年はこの点を理解いただいた方々からの依頼が増えてきました。

——(三枝) 財団法人化して家を守られたらどうですかとか、そういうような意見を述べる方は…。

めぐみさん ありますね。

——(三枝) それもやっぱり一長一短だなって。

めぐみさん そう思うんです。そういうことも必要なのかなっ

ていうのは考えないではないですけど、法人化することによって、一定の成果を迫られるという。そうすると、自分たちの思いのままに、と言うと誤解されてしまいそうですが、気まま、イコール、この家らしさ、という意味なんですけど。やっぱりそこを崩さないといけなくなってしまわないか、それってどうなんだろう。と思うと、そこは本当に難しいです。

限界あります、自分たちだけで守るのには。最終がどういう形になるかはまだ分からないですが、できれば、よい形で生かしていただけるような仕組み、そのつなぎを私ができたらいいなと思ってますけど。もうここに固執は何ももう、今となってはありませんので。

トキさん もう一遍捨てましたから。

めぐみさん そのときは、お仏壇はきちんと空けておかないとね、と、母と話していますけど。自分たちがいなくなると、大切に扱っていただけののなら、何よりも嬉しいことですから、そうではなく使われるのは、つらいことで。いつそう、なくしてしまったほうがすっきりするというのが正直な思いです。個人の住まいとして、生きてきた家ですから。

——(三枝) でも、もしそんなことになったら、町も本来は困ると思うんですけど…。

めぐみさん もともとは、祇園祭のお飾り場を町が所有してい

なかったもので、町内の家々が順番にお飾り場の役を担ってきたようですが、今では大型の町家はこの家一軒になってしまつて、毎年、家の表屋を飾り場として使うようになったのは先代の頃からですからもう五十年近くになりますか。

町は困りますでしょうね。でも、今までもう十分うちでやれることはさせてもろてきたと思いますし。正直な気持ち、大事に扱ってくださるならいいのですけどね。

トキさん 扱いが、見えてこわいです。

めぐみさん 違うなあ。

トキさん 知らんうちに提灯を吊る釘を何本も梁に打ったりされたこともあるし。

めぐみさん 心配で、目を離せないですね。

トキさん できないです。

めぐみさん あくまでも私たちの家であつて公共の建物ではないんですけれど、捉え方が違うというのか。「七月」一三日の山建てから一七日巡行の日まで、前日の受け入れ準備も合わせるのと六日間、それが毎年です。負担は年々大きいと感じています。お町内としても本気でこの状況を考えていただきたいと思つています。もう、いつまで協力できるかわかりませんと、折に触れてそんな話はしていただけないですね。

トキさん なかなか本気になつていただけないですね。

めぐみさん 本当に。だから、今はうちのできることをできるかぎり。

トキさん やるだけ。

めぐみさん 肅々とやるだけで。そう思つてます。

——(三枝) いわゆる町家ブームが来たつていうタイミングよりも先に、公開の決断のほうが早かつたんですね。

めぐみさん そうでした。ブームが来るなんて思いもしなかつたです。家のことで動き出したのは九四年でした。この家のことで市の文化財保護課へ相談に行つていたのはこの頃で、翌年の一月に阪神淡路震災があつて、同時に同じ建築年代の大型の町家を取り壊されてマンション建設がはじまりました。木造の安全神話が壊れて。京都から木の文化の発信をしようという声が上がつたり、京町家再生研究会は発足から三年を迎えようとされていたようで、気がついたら、そうした京町家保全の流れの中にこの家もありました。家を公開するにあつて、会場費や見料をどう設定するのか。それ以前に、そんなことで対価を頂くなんてということへの抵抗感は、私たちにとつて大きな精神的な試練でしたね。

とりあえず形は作つたものの、今のようにホームページもSNSのような簡便なツールもなかつた時代でしたから知つていただく手立ても分からない状態で。とりあえずパンフレット作

って。本当に普通のこういうコピー用紙のA4を三つ折りにしたのを作ったのかな。

トキさん 必死やったな。

めぐみさん あのころはもう、何かやらないとというので。家を公開するといつても、それこそ観光ビジネスなんていう気持ちになれないですから。口コミで広がっていくなかで、共感してくださる方との出会いがあったり、京町家という言葉が全国的に知られるようになるうちに、取材を受けることもありました。徐々に知られるようになっていきました。この二十五年あまりの年月は、長いようであつという間に過ぎたような気がします。今日までの経験から、一貫して大切に思っていることは、この家を見世物として扱わないこと。どんなに京町家秦家住宅という文字が世の中を独り歩きしていても、今も私たちが家であることを忘れないようにしないと、今もこの家にある生きた空気を大切にしないと、公開している意味そのものがなくなってしまうと思っています。

四 町との関係 薬種業者との関係

——(三枝) 家がこの二十年〜二十五年の間、そうした変化の波を受けている間、町との関係はどんなふうに変わって行っ

てるんですか。町も変化の波が激しいように見えますが…。

めぐみさん 町ですか。お町内。

トキさん 関係ないですね。

めぐみさん 家の、この二十年の変化の波はどこまでも私の家の内情で、直接お町内との関係性が変わっていつているとは感じないですね。

京町家として知られるようになったこの家がどんなふうに見えるのか。見られているのか。きっと黙ってご覧になっているのでしょうか。私たちとしては、どこまでも公開以前の秦の家として町内に居るつもりでいますし、町からも、そのように思っただけのことがありますし、町からも、そのよ

——(小林) 薬屋の仲間との関係については、廃業したときから、もう完全に切れたんですか。

めぐみさん それはないですね。

トキさん なかったです。特に主人は、そういう商売関係についてのは、一切自分から。

めぐみさん 出ていかなかった。どうしても必要な集まりのときには出ますけど。当たり障りなくお話しして帰ってくるという。薬としては、種類が違うので、競合はしてなかったと思うんですけど。それぞれが違う特色のある薬の薬屋でしたから。

——(小林) 二条の薬屋仲間は、かなり西洋薬だと思っ

すけど、そういう和漢薬同士のつながりみたいなのもないってことでしょいか。

トキさん なかったです。

——（小林） 親戚でも、薬屋さんの例えばのれん分けとか、そういうのは、お付き合いは全然なかったんですか。

トキさん なかったですね。

——（小林） そうすると、お父さん亡くなったら、もう本当に何の付き合いも、親戚もいなければっていう感じ。

トキさん そうですね。

めぐみさん 父の兄も亡くなってますし、母方の親戚だけですね。

——（小林） 薬のことをもうちょっとついでお尋ねすると。薬屋さんだと、井筒という名称の店が何軒もありますし、五条通のところは大和屋っていう薬屋さんもあって、それはそれで、そういう家同士の付き合いっていうんですか。そういうのが割と強調されていると思うんです。ここでしたら例えば松屋ですとか、そういうふうなつながりもなかったですか。

トキさん ないですね。

めぐみさん そういう横のつながりの話を聞いたことはないです。

トキさん ね。

——（小林） 奇応丸っていうのは、おそらく何軒があったと思うんですけど。

トキさん 昔は。

——（小林） その奇応丸同士の付き合いもないんですか。

トキさん はい。それ、たくさんできた時代の話を、全部その株を買って、うち一軒になったっていうことを聞いてました。それはもう昔の話やわな。

めぐみさん 明治九年（一八七六）の薬屋の番付の板木では、私のところ以外に何軒か奇応丸を製造していたお店があったようですけど。当時、お付き合いがあったかどうかはわからないです。

——（小林） 奇応丸っていったら、もうここだけになったわけですね。

トキさん はい。そうみたい。

——（小林） 漢方が廃れたときに、一軒だけに集約されたのかも分かりませんね。

トキさん お互いに競争したほうが残るのかもしれない。

——（小林） ありがとうございます。薬屋のことをちょっとお聞きしておきたかったので、ちょうどよかったです。

五 お料理の会を始める

——（小林） この今のお話で、もう一回同じことを繰り返してお尋ねしてしまうことになってしまっていますが、町家再生研究会の例会が、秦家にとって最初の公開ですね。

めぐみさん そうです。

——（小林） これが何日かっているのは、覚えてらっしゃいますか？

めぐみさん 九六年の一月二八日でした。

——（小林） で、同じ年の秋に料理を。

めぐみさん はい。とにかく、何か私のできることはないかと思つて、この家の味覚を空間と一緒に体感してもらうことを趣旨としてできないかなと思いついて。木の文化研究会っていう研究会があつて、東樋口護先生という京都大学におられた先生なんです、そのメンバーの人たちも、ここで例会、木の文化研究会の例会をやつたりもしてくださつてたんです。そのときに、試食会をしたいので来てくださーと思ひ切つてお願いをしたのが最初で。

トキさん 必死やつたね。

めぐみさん 器がないんです。そんな普通の家に。

トキさん ほんで、古いのやらなんか、もう寄せこせやつたね。

めぐみさん 寄せこせで。そのとき了光院さん（日蓮宗、秦家の菩提寺）から、徳利も借りたな。

トキさん そうそう。

めぐみさん なかつたから、借りて。で、だいたも手伝つてもらつて。そしたら、お上人（しょうにん）の奥さんは、やつぱりお斎（おとき）とかやつておられるから、大人数のときの段取りをよくご存じで、勉強になったのを覚えてます。でも、いつときに何十人っていう人が来られると、その中の一割でも、共感して頂いた方がまたひとりとお連れただいて。その繰り返しです。

——（三枝） お料理を食べにいらつしやる方は、京都の方が多ですか。

めぐみさん 京都の方も最近が増えてきました。

トキさん 最近になって増えてきました。

めぐみさん でも、やつぱり京都在住でも出身地は違うという方の方が多いように思います。それから、建築設計とか、都市計画とかに関わつたりという人たち。ここ数年は、海外の方が旅行社を通して来られることもあります。二十年以上が過ぎて、最近になってやつと、ここのお料理の趣旨を十分に理解い

ただいたうえで来ていただけるとなってきましたね。情報の集め方が皆さん長けて来られたということもあって。

トキさん これだけ時間掛かるんですね、やっぱり。

めぐみさん 一回りして、十年ぶりぐらいに、ぽつとまた来てくださる人がいたり。改めて、あ、秦さんのところはこういうことをやろうとしてたんだなっていうことを確認してくださると、またつながるご縁があったり。不思議ですね、人の流れて。

トキさん どんどん広告するわけやないので。もっとそれをするればいいっていう方もいるんですけど、それは私たちの趣旨ではないし。

でも、二人とも好きなんです、だいたいこのことをするのが。そやから嫌にならへんのですよ。いくら何回かあっても。それがおかげさんで助かっています。これが嫌々せんならんって思うたらあれなんですけど、楽しいんです。

——(三枝) お料理をお出しするようになった少し後に、お料理を教え始めたのは…。

めぐみさん 鯖寿司の作り方を教えて欲しいという依頼があったので始めたのがきっかけになりました。

——(小林) それは、いつごろからやっておられるんですか。めぐみさん それが二十年ほど前ですか。その後、『おりおり

の季節ごはん』という本を二〇〇八年に出版して頂いたのをきっかけに、料理の会としてホームページにも掲載しました。

トキさん あの本も、扶桑社の方がうちへ食事に見えて、ほんでおいしいから、それやったら大丈夫やからっていうて、本を作ってくれはったんです、一年かけて。

めぐみさん その本の前に、『とっておき京都』という季刊誌に、「秦家のはしりもとから」というタイトルで四季の料理の写真とエッセイの連載の依頼を受けまして。本の出版は、そのご縁から頂いたお話でした。お受けしたときも、お料理のレシピ本ではなくて、京都の町家の食まわりの背景にある暮らしぶりのことや、住まいのことを紹介するような本でならと無理を言って。それならと、お受けさせて頂きました。

——(三枝) そこで、ぜひお料理を習いたいですって来られる方は、一度ここに来たことが縁でとかですか。

めぐみさん 出版して頂いた本を見たと言って見学に来られて、とか、直接ホームページに料理の会って出してからは、料理の会に参加したいですっていうふうに言ってこられることもあります。四国から通って来られる男性もおられました。研究者ですけど。学会とここでのお料理の会のスケジュールを合わせて参加されました。

——(小林) 男性はその方ぐらいですか。

めぐみさん 同じグループにもう一人。そのグループの女性の友達で、彼女にこの料理の会に来た方がいいと勧められたとかで。その方は三〇代と若くて今時の外食中心の生活をしているので。なんでもない煮物だったり、味噌汁だったりに、食べたことない、美味しいと、そのうち作ることに興味を持たれて、少しずつ目覚めていかはるといふか。お顔の表情とかも変わってきはるんです。

トキさん 面白いね。

めぐみさん うん、それは何なのか分からないけど、食べる事って面白いですね。食というものは、家の中においての存在として、すごく大切だと、つくづく思います。

—— (三枝) ある時代のある京都のおうちだったら、ごく普通にやっていたようなことが、このおうちに生きてる。

めぐみさん 京都に限られたことではないように思うんです。どこでも、食事はお出汁を取ることからはじまって全てを自らの手で作っていた時代から、出来上がった食べ物を買ってそろえることができるようになって。短縮された時間はお仕事だったり、その他の趣味だったりに使える時代になってきて。これは私たちの生活の根本を変えてしまったのかなと。人の暮らしの根本って何でしょうね。食べることは生きるために必要ですけれど、空腹を満たすことだけではないと思うんですね。家族

の顔を見ながら、旬の材料を見つけて、触れて、作って、食べる。その作業のプロセスのなかで、人の五感には刺激を受けますね。私が子供の頃は、子供のお手伝い仕事だったようなことですが、カツオ節の削り節器の扱い方を知らない方も結構おら

写真3 お料理の会に際し、削り節器の使い方について説明する様子
(二〇一七年一〇月七日撮影)



れて。

——（小林） 普通の削り節器ですか？

めぐみさん そうです。この間も、わりと年配の方なんですけど、「秦さんこれなんです」って、持ってきていただいた。これねって言って、ふた開けて見せはったときに、びっくりしたんですけど、その中のも抜かれるんです。ほんで、刃を見せたのかと思つたら、いや、これをどうしたら削れるのかわつておっしゃるんです。もうお一人の方と一緒になつて、斜めに、向こうに斜めがけすんのや、いや、こつちに斜めがけすんのやとかいつて悩んだつておっしゃるから、いやいや、それは動かさないほうがいいと。削り器のふたを開けたら、刃の入つたのがはまつてるでしょ？箱に。で、そのはまつた状態で削ればいだけなのにな……。

——（小林） 男の人だから教つてこなかつたのかな。

トキさん かもしれません。

——（小林） 昔はだつて、削る前の状態でしか売つてませんでしたから。削り器がないと食べられないというか、だしも取れない。

トキさん そうですよ。あれしかなかつたですよ。

めぐみさん かつて当たり前前のが今は当たり前じゃないから、私たち、この家の存在は、今そこに生かされてるなつて。

トキさん そういう人のためにあるのかなと思います。

——（小林） 今、それ、かつお節もパックでしか、みんな買いませんから、もう。

トキさん そう。パックのあれしか分からない（笑）。

——（小林） ますます必要とされてるかもしれません。

トキさん ほんで、もう、だしの素を入れれば、それで味が出るから、そればかりが使われる。ほな、添加物が入つてますよね。そんな体によくありません。悪循環ですよ。簡単でつてというのが今の流行らしいですけど。もう全然、かつお節の味や香りが違いますもん。

めぐみさん この間、『和食の散歩道』という本を出版された府立大学の太谷（貴美子）先生つていう女性の先生がおられて、その先生の調査の結果、幼稚園とかいろんなところで今、食の調査を、子供たちの調査をされると、ご飯のおかずとして野菜そのものを絵に描いてつていったときに、子供の描く絵がサラダなんです。野菜料理イコールサラダ。それ以外の料理がない。それが今の子供たちの食卓やと。菜っ葉のおつゆとか、あえ物が無い、野菜の煮物とか、お芋の煮つころがしとか。

トキさん かぼちゃの炊いたんとか。

めぐみさん そうそう。そういうのがない。

——（小林） この間、テレビで京のおばんざいって、京都の人はおばんざいって言わないとか言って、やってみましたけど。めぐみさん 言わないです。

——（秋元） でも「おばんざい」っていう言葉をどなたかが使われて、それが、まるで京都の人みんなが使っている言葉のように広まったのでしょうか。

めぐみさん 大村しげさんと言われていたんですね。でも、その大村しげさんも、抵抗を持っておられたっていうことを聞きました。おばんざいっていう言葉は、私たちはおかずって言うっていう。だけでも、分かりやすくするために、おばんざいという言葉が求められている。それなら、それ受け入れましょうという。

——（小林） 今、それが売りみたいなの居酒屋みたいなのがいっぱいありますよね。

めぐみさん ありますね。雑誌やテレビの料理番組でも京都のおばんざいという言葉よく使われるからでしょうね。

トキさん 和食和食っていうのは、やっぱりそういうものを食べんようになったでしょうね。ぜんまいの炊いたんとかね。

——（三枝） たしかにそうした和食を自分で作って食べることは、なかなかないですね。家で食文化を育むという、これまではなんとなく当たり前にできていたことがそうではなくなっ

てきて、「おばんざい」とか「和食」とか、特別な名前がもてはやされるようになってる…。そのことと、町家という家が文化財の登録や指定の対象となっていくこと、この二つはどこかでリンクしているのでしょうか…。

もう少しお話をうかがいたいところですが、予定の時間をかなり超過してしまいました。長時間にわたってお話いただきまして、どうもありがとうございました。

——（小林） 今回もたいへん長時間になってしまいました。おうかがいしたことを今後に生かすことができるよう、できればまとめておきたいと思います。今後ともご協力の程よろしくお願いいたします。

附記

本研究は、科学研究費補助金基盤研究（C）「家・町・町家の存立基盤をめぐる歴史学的研究—京都市太子山町・秦家を事例として—」研究代表者秋元せき（JSPS 科研費 JP19K00986）の助成を受けたものです。

（第21期第12研究会による成果）